

令和元年度第1回奈良県こども・子育て支援推進会議 議事録概要

- 日 時：令和元年8月21日（水）14:00～16:00
- 場 所：奈良商工会議所地階 AB 会議室
- 出席者：奈良県こども・子育て支援推進会議委員（委員13名中、9名出席）
川端章代委員、栗木裕幸委員、島本太香子委員、末松保喜委員、田中加寿子委員、
並河健委員、宮本幸代委員、宮本忠史委員、和田公子委員
- 議 題：（1）推進体制等について
（2）奈良県の子ども・子育て支援の現状について
（3）少子化対策及び子ども・子育て支援に関する計画の策定について
（4）令和元年度の取組について
 - ・令和元年度 予算の概要
 - ・市町村における妊娠期からの切れ目ない支援体制について
 - ・子育て応援「つながる箱」プレゼント事業

●質疑応答・意見内容

<並河委員（天理市長）>

○天理市の取組紹介

- ・子育てを巡る諸課題は様々あるが、重視しているのは、母親が経済的、時間的、精神的な負担感を、孤立した状態で抱え込まないようにするには、どうすれば行政がしっかり対応でき、いつでも相談ができる妊娠期からの切れ目ない支援であるかということ。
- ・子育て家庭が抱える問題は相互に複雑に絡み合っており、特効薬はない。
- ・行政機関に相談に行くのは、それだけで心理的にハードルが高く、そこへこぎ着けるのが難しいので、特段相談することや目的がなくても「遊びに来てもらえる場所」を提供することが大事になってくる。
- ・市役所別館の保健センターに併設するかたちで開設している「天理市子育て世代すこやか支援センター はぐ〜る」では、目の届く広さで屋内と外遊びのスペースを設け、子どもを遊ばすために通ううちに顔なじみになって、相談を受けられる体制をとっていく部分と、色んな支援が必要になったとき、相談に集中してもらえよう託児サービス2時間無料というサービスを一緒にしている。
- ・保健師・助産師・保育士が面接し、子育て家庭から話があれば、担当課につなぐ体制をとっている。
- ・DV ケースで転居されてきた家庭の事例では、託児を利用しながら、心の相談から転居や保育所入所手続き、また、市役所地下のハローワーク分局で就労支援に繋げることもできる。保育所入所が難しい場合は、教育委員会と連携し、幼稚園の長時間預かり保育の紹介も可能である。

・行政の職員だけが支える側に立つのではなく、どうすれば間口を広げられるかと考えており、産後支援の「産後ドゥーラ」の養成や、先輩ママさんによる子育てサークル、サロンを実施している。結婚して天理市に転居してきた方で、成人としゃべるのは配偶者のみというケースが少なくないなかで、一緒に支える仲間づくりも大事。

・このような活動の積み重ねにより、平成26年を総合戦略の基準年としているが、

- ① 子育て支援の拠点の利用者数 14,000 人から 18,000 人超、2 割以上に増加
- ② 3 歳児健診での市民アンケートで、「育児でイライラする」母親の割合が、77%から 70%へ低下。高止まりではあるが、1 割程度減少。
- ③ 保育サービスに満足している市民 2 割以上増加
- ④ 遊び場を重視した多世代交流のきっかけづくりとして、駅前広場を整備したことで、26 年度に比べて満足した人が 1.5 倍。
- ⑤ 家庭における子育て支援の満足と不満の方の割合が、満足 16% 不満 21%から、満足 21% 不満が 14%と逆転。

・どれだけ行政が直にやれるかというのは、予算面、体制面等に限りがあるが、実際に目に見える形で具体的な施策をやっていくことで市民に伝わっている。

・県と市がしっかり連携して、できるだけ具体的な成果が上がる施策を展開したいと思っている。

<和田委員>

・奈良県子ども・子育て応援県民会議での審議の際、委員の皆さんからさまざまな意見がでた。印象深かったのは、よく泣く、よく動くという「発達に不安」、育てにくいと感じている母親たち。社会から泣き声やガサガサすることを親の管理、子育てへのハードルに掲げられているが、それらは子どもにとっては当然の発達の道筋。乳児がお腹が空いて泣くのは、夜泣きではない。

・子育て支援センターの母親で「ワンオペ」ということばをきくだけで涙が溢れてくる人がいる。夫は理解がないわけではないが、私が一人で育児していると感じている。

・社会人として、一定のキャリアを持って仕事をしている人がほとんどだが、父親や母親としての「社会化」はまだまだ不安があるので、親を育てる指針も大事ではないか。出産と同時に母親が、子育ての方法をわかっているわけではなく、初めて抱っこするのが自分の子どもという母親も多い。ほんの1歳未満のお子さんであっても、長時間同じ遊びをするべきだと思っていたりする。

・高齢出産の母親は、仕事人としてのキャリアには自信を持っているが、子どもをもった途端に、母親としての自信のなさ、自分への不信感を感じ、先の見えない孤独感にさいなまれる。

・それらの妻の母親としての悩みを夫が父親としてどこまで理解できるかが問題。

・満員電車の中で、泣いている子を舌打ちしながら見ている大人がいる一方、こうあるべき、

こう育てるべき、母親はこうあるべき、というプレッシャーや壁を感じている母親たちが多いように思う。

- ・祖父母からもなんとかすべき、こうする“べき”というプレッシャーがある。祖父母の方が、「はじめが大事だから」と、しつめに厳しい。

- ・子育てのストレスは共働き家庭の母より、専業主婦で、自分で子育てする母親の方が感じている。いわゆる「三歳児神話」の悩みを抱えている。

- ・今回、対応策を県に出していただいた。どのような計画になるか、形はまだ見えていないが、これから丁寧に対応策を検討いただきたい。子どもにとって幸せな社会は、母親や父親にとっても安心できる社会ではないかと思う。

<島本委員>

- ・産婦人科医の立場からお話すると、女性の健康に関する正確な情報と、適切な認識を、女性自身はもちろん、すべての世代、あらゆる人に持つてもらふ必要性を強調したい。

- ・妊娠期からの切れ目のない支援はそのとおりであり、支援する側も、される側も、女性の妊娠出産というライフステージの特徴を正しく認識する必要がある。

- ・妊娠・出産は、バックグラウンドに生物学的な大きな変動がある、ということ、それは、女性にとっての健康問題でもあるという認識を、本人もご家族も周囲の支援者も持っていていただきたい。

- ・母親が不安を感じる時期、出産前後、新生児期については、以前より指摘されている事である。生物学的に女性は命がけで出産している。身体もこころも劇的な変化がある。その中で、抑うつ気分が強まる時期、マタニティブルーなどがある、ということを理解していただき、そのような時期、普段の体調にもどるのには支援が必要なことなどを理解していただけるといい。

- ・現代は、情報はいくらでも入ってくるので、情報の信憑性や信頼できるのかどうかは、利用者が判断しなければならない。様々なことが書かれていて、逆に不安を募らされている方も多いようだ。

- ・そこで、産婦人科学会では正確な情報を必要な時にとれるようにと専門家によるアプリの開発をしている。信頼できる情報を発信しているところから、正確な情報を得ることが重要である。様々な関係機関が連携し、それぞれの不安に応じて必要な情報を、個別につなげていく仕組みづくりが大切。

- ・計画の中で、数値目標は必要だと思うが、平均値や数字だけでは語れない部分があるように感じる。奈良県では伝統的な文化と都市文化の間に価値観の格差、多様性があるので、すべて平均値で集約すると見えないこともあるかもしれない。数値を年度で比べていくだけではなく、個別の声を聞くことで、子育ての障壁要因を挙げていくのは一つのアプローチ方法ではないかと思う。

- ・子育てのスタンダードを示すだけではなく、多様性を認め、それぞれに適したものを、方

法を選んでいけるということは大切だと感じている。

- ・子どもがいても働きたいけれど働けない、その理由に働くことを家で許してもらえない、そのことが大変ストレスだと感じるという声がある。

- ・長寿社会となり、孫育てだけでなく、ひ孫育ても行われる時代だ。価値観の乖離は家庭の中でも起こる。それぞれの時代を生き「世代」によって異なる価値観があると思うが、世代間のギャップを理解し合い、祖父母も曾祖父母も頼もしい協力者になってくださることを期待したい。

- ・この会議では、県の各部署で、奈良県で子を育むということに関して、「共通認識をもって」施策を展開される、と理解した。行政機関のなかで様々な計画があるが、「奈良県の子育て」という視点をそれぞれの分野でもいつも持っていたらいいのではないかと。

- ・現在警察の仕事に関わっているが、「安全安心確保のための奈良県計画」(平成29年4月)があり、その中にも子どもを守る視点がある。「ながら見守り」があるように、地域で何ができるか、「子育て」という言葉までではないが、その視点も入っている。

<栗木委員>

- ・「子育て全てが分からない」のは、分からなくて当たり前。

- ・以前とちがい、核家族であるから、情報を得るのはスマホからの情報。幼稚園や保育所に通っていたら、文字では表せない経験値をもっているのも、悩んでいる母親を和ませ、ひろく捉えることができ、「そうじゃない」「そんなに難しく考えなくてもいい」と、伝えることができるはず。スマートフォンや書いた物で、母親の不安感を癒やすことはできない。

- ・保育の現場でみていたら、祖父母より母親の意見の方が強いように感じる。

- ・天理市の取組は、集約され、うまくリンクされていると感じる。縦割りではない。天理市の取組は、みんなで支えていくシステムにされている。県ももっとこういうのを取り入れてはどうか。

- ・遊びのなかで、相談と支援ができること。母親たちは不安をもっているのも、こまめな場面で話しやすい雰囲気づくりをする努力は必要だと感じる。困ったことは「相談をしてください」ではなく、こちらの方から提供する場面づくりを。

- ・奈良県をみると、公園がなかなか少ないように思える。大きな公園は難しくても、遊具がなくても、同じ立場の者同士が声をかけられる、話せる場があればいい。

- ・遊んでいるところを、他の者が「どうしたの?」「たのしい?」「大丈夫?」と、声をかけられる雰囲気づくりは、親御さんではなく、保育の立場の者が提供していくことによって始められるのではないかと。敷居の高くない、気持ちを投げ出せる場づくりは、声をかけやすい雰囲気づくりが大切で、我々からしていければと感じている。

<宮本(忠)委員>

- ・出生率の問題でいうと、不妊治療。晩婚化・晩産化している。不妊治療の補助制度があっ

でも額が低いし、不妊治療技術が充実した場が奈良にはない。1回50万や100万ほどかかる。1回で済めばいいが、奈良県はバックアップができていないので、お金のかかる話だが、出生率を上げる一助として、やってほしい。

- ・市町村の子育て支援は行政で1本化できていない。市町村では子育て支援は一生懸命取り組んでいるし、片手間に保育士に預けたり、2・3時間託児サービスを受けて、育児相談するにしても、数の限界がある。

- ・公立・私立問わず、幼稚園問わず、開所していないとき、園庭開放し一般の方にお越しいただくようにしているが、その中で面談や育児の相談が自然の流れでできている。

- ・母親同士が友達になることで、母親同士で問題解決ができ不安感がなくなる。いかに母親同士の出会いの構築、きっかけづくりの提供ができるかが重要。

- ・奈良県は、専業主婦率が高いのを文化と考え、そこは否定せず、どう地域と遊ぶ場を提供するか。インフォメーションを打ち出しながら、参加してもらいやすい環境づくりを提供していくことが必要では。

- ・高度経済成期に多くつくった公園が、今メンテナンスの時期にきている。遊具が金属疲労だったり、草が伸び放題だったり。すべて行政に丸投げできない状況になっているので、自分たちも公園の草刈りをしている。遊ばせてもらっているし、地域の協力が必要だろうと思う。公園はたくさんあるが、公園のメンテナンスのことも考えてほしいし、地域の方たちが守っていくかたちで考えていく必要もあるのかと思う。

- ・県内に遊びに行く場がたくさんあるが、気楽に行くにはお金がかかる。うだアニマルパークはいいことをされていて、体験型もある。是非、幼稚園児くらいまでは無料にしてほしい。

- ・県として子育てに優しい受け皿にされるなら、無料にするくらいの腹づもりでやってほしい。お金を気にせず出かけられる場所は、優しい子育ての根幹ではないか。経済的不安をカバーするのは、ある面、県で担えるところは担って、健やかに育む体制を検討いただけたら思う。

<末松委員>

- ・資料で衝撃を受けたのは、妻が「夫を信用していない」「任せられない」と思っていること。ここは掘り下げてしっかりと支援をしていかないと女の人はいんどいままになる。

- ・生む性と、そうでない性。女性がどうしても負担を感じているのは、ある程度そうかなと思いつつ、安心感がほしいところに、夫はまだまだ昔ながらの価値観がある。特に奈良県は根強く未だにあるんだなと驚いた。

- ・朝ドラの話だが、キャリアを積んだ女主人公が、産休を取り、仕事復帰するために役場へ保育所のことを聞きに行くと、役場の方が「こどもを犠牲にしてまで仕事に復帰したいのか」という言葉を放つ。昭和40年代のドラマだが、未だにその呪縛から抜け出せていないのであれば、なんとかしないとかなという感想を持った。

- ・委員のそれぞれの立場で、自分たちにできることは何か、真剣に考えるところと何か開け

てくるのでは。

- ・自分を振り返ると、20年近く働いてから育休を取り、復帰した。復帰できたのは保育園もだが、学童保育の力が大きかった。そこで知り合ったママ友は今も付き合いしている。
- ・生駒市は支援がきめ細かく、長時間預かってもらえたり、学童が終わった後も保育ママ的なサービスで、家庭で預かってもらえたりした。
- ・キャリアを積んでいる人ほど、簡単にキャリアを捨てようとする傾向があるかもしれない。子どもをやっと授かった、何ものにも代えがたいと、長いキャリアをいとも簡単に諦めるかもしれない。私は今になれば、石にかじりついてでも辞めなくて良かったと思う。いろいろな価値観があるが、これから高齢出産が増えていくと思うので、女性が長く働き続けてほしいと思っている。
- ・福祉の世界は、人が集まらない。保育所の確保や継続等、いろいろなものを立ち上げても、担っていく人材がいないのは厳しい。

<田中委員>

- ・奈良市内で4拠点 地域子育て支援拠点事業を行っている。
- ・現場としても、課題をとらえながら、解決策の仕掛けや、つながりをつくっていったらいいが、悩みながら育児をする母親の存在は肌で感じている。
- ・ひろばのアンケート結果では、7割近くの方が、もともと育った地域とは違う地域から引っ越してきている。子育てとともに新しい生活をしている。
- ・1年程度で復職する母親たちが増えている。以前は2、3年だったが、今は1年くらいで母親の顔ぶれが変わっていく。そのため、妊娠中からしっかり拠点を知り、タイミング良くつながっていき、なにかあったとき、相談してもらえよう、保健所にある「そらいろ」では、妊娠中からひろばを見学する機会をつくっている。
妊婦の声から聞こえてくるのは、引っ越してきて知り合いがいない、今まで小さい子と関わったことがないということ。妊娠期からの切れ目のない支援の必要性を肌で感じている。
- ・近所づきあい、地域でのつながりが希薄になっている中、1年前後で職場復帰していく母親が、短い間でも仲間づくりがしっかりできること。インターネット等で得た表面的な情報に振り回され、悩みがちな母親が、ひろばで他の子育てや子どもの育ちを見ることによって、自分らしい子育てを選んでいけることを、めざしている。
- ・世代間交流の場もひろばでつくっている。若い学生にはボランティアや実習にきてもらい、子育てを知ってもらう。高齢者の方には、若い世代の子育てを知ってもらうのと同時に、温かい目線や昔の子育ての良さを伝えてもらい、互いの価値観の行き来をしてもらう。さまざまな人との交流の中で、子育て中の世代の視野が広まりどんな子育てをしたいのか、行く行くは、自分らしくどう過ごしていきたいのかを考えることにつながれば良いと思う。
- ・地域に出て行き、地域に活動を知ってもらい、地域の人の手で悩んでいる家庭へ情報を届けていただくのも大事だと感じている。取り組みを知ってもらうことが、子育て家庭の孤立

を防ぐことにもつながる。

- ・高齢出産が増え、子育てと一緒に介護をしているなど親子が多様化しているため、多様なケアが必要。
- ・情報を集約したり、その人その人の支援を組み立てられたりと、俯瞰した見方ができる地域のキーパーソンの育成は必要。
- ・奈良県内の傾向、課題があると聞かせてもらったことを現場に持ち帰り、支援を考える上での参考にしたい。

<川端委員>

- ・自分の実感も踏まえて、とてもおもしろいと思ったのは、妻と夫の価値観の違い。男性は仕事を休んで子育てに参加したいと思っているが、女性は、男性に休まれると、男性の食事の世話や色んな世話をしなくてはいけないと思ってしまう。
- ・共働きをしている家庭の方が一緒に力を合わせて子育てをする意識が高いのが分かった。
- ・働く母親からきくのは、小1の壁。保育園までは延長保育があったが、小学校にあがったら、18時までしか預かってもらえないので、働く女性にとったら課題。
- ・企業は利益や売上げを上げるだけでなく、昨今、健康経営が企業責任となっている。社員の健康をどれだけ考えているか、企業責任として問われている。同じように企業としての子育て制度があったら、企業も参画できるし、働き方改革にもつながっていくのではないか。制度づくりや仕組みづくりをしてもらえたら、企業がそれにのっかること、家庭がうまくいくのではと思った。

<宮本（幸）委員>

- ・お父さんの悩みやお母さんの悩み、色んな悩み・課題が書いてあり、保育士出身なので、課題が広がり難いと思うが、とりまとめしてあるのでありがたい。
- ・働く者の立場から、男性も女性も、子どもを生み育てるところの、環境づくり、労働力不足だから女性が働けばいいという訳ではないが、女性も社会に出やすい環境を。
- ・わたしたちの希望は制度の充実。どんどん制度はよくなっているが、例えば、保育園の入りやすさ、設立、駅前等立地のよさ、延長保育の充実。
- ・選択肢が増え、働く人たちが、これから結婚して子どもを生み育てるときに、選択肢があることは、何年か前よりだいぶ改善された。
- ・課題は企業の労働条件。いろいろな制度を変えていきたい。男性の育児（のための休暇）取得制度や、こんな制度があれば辞めないですむのにといい制度は、企業や私たちが声を発して変えていけたらいい。
- ・県としては、広い範囲の指針づくりをしていってもらうことが大切。
- ・子どもが病気で休みたい時、保育園で預かってもらえない時、病児保育であずかってもらえるところは増えたが、どうしても休まないといけない時、急に休まなくてはならなくなっ

たとき、周りの者が、休むことに対して「いいよ」と言える社会になってほしい。

・すてきな名前のプランになっているので、県から市町村や企業、地域へおろしてほしい。